

# 杜甫の「竹林七賢」観

The DuFu (杜甫)'s view of "ZhulinQixian (竹林七賢)"

河野哲宏

## 要旨

杜甫の詩において見られる「竹林七賢」観とは、その共通する属性としての超俗性を挙げられる。しかし、「竹林七賢」としてではなく、七人それぞれに対する認識では差異が見られる。阮籍と嵇康に対しては、その志を持ちながらも果たせなかったという属性が共に語られ、杜甫自身を仮託している。特に阮籍では、外在的な要因に目が向けられ、それに反して嵇康では、内在的な要因が挙げられる。阮咸、山濤に就いては、阮籍、嵇康との関係による言及が主であり、この関係性に杜甫が触れるとき、杜甫自身は阮籍、嵇康の位置にあることから、阮籍、嵇康への仮託ということがいかに杜甫にとって重要であったかを示している。他の劉伶、向秀、王戎に就いては言及が見られず、断定はできないが、あまり関心を向けなかったと思われる。つまり、杜甫にとって、阮籍、嵇康の志という属性が重要であり、そのような属性を持たない他の五人はあまり言及されなかったのだろう。

## キーワード

杜甫、「竹林七賢」、阮籍、嵇康、志

## はじめに

杜甫（七二―七七〇）は、盛唐を代表する詩人であるだけでなく、中国を代表する詩人と言える。では、そのよ  
うな中国を代表する詩人は、前代の俊賢である「竹林七賢」をどのように捉え、その詩に描いたのだろうか。

これまでなされてきた杜甫の詩に関する研究の多くは、詩の制作年代に重きを置き、その時々々の杜甫の感慨や置  
かれた状況といったことを考察している。これらの研究は、至極当然であり、筆者もそれに異を唱えるつもりはな  
い。しかし小論では、杜甫の詩を考察の対象とはするが、詩の制作年代を考慮せずに進めていく。それは、次章以  
下に見ていくように、杜甫が制作し、現在見ることでできる詩の内、「竹林七賢」に言及している詩を見ると、杜  
甫の「竹林七賢」理解に経年による評価の大きな変化はないからである。そこで小論では、杜甫の「竹林七賢」理  
解の総和として、「竹林七賢」がどのように語られているかを見ていく。

「竹林七賢」に言及した詩は、四七例見つけることができたが、「竹林七賢」全員に言及していると思われるもの  
は二例、阮籍二八例、嵇康一四例、阮咸四例、山濤二例（全て並称を含める）であり、王戎、劉伶、向秀の三名は言  
及されている詩を見つけることができなかった。言及される数に差があることから、まず、第一章にて阮籍に関す  
るものを扱い、第二章にて嵇康に関するもの、第三章にて残りの五名をまとめて考察する。

## 第一章 阮 籍

杜甫の詩<sup>①</sup>において、阮籍はどのように語られるのか。

杜甫の詩に描かれた阮籍を見ていく上で、「途窮」は頻繁に言及され、杜甫の阮籍観を示す重要な語となると思われる。まずは、「阮籍」、「歩兵」、「青眼」など阮籍自身を示していると思われる語を用いた詩を中心にみていくが、やはり「途窮」はそれらの語とともに頻繁に現れる。

まず、「敬んで鄭諫議に贈る十韻」を見る。部分のみ挙げる。

（あなたが）一諾を重んずるのを約束してくれば、

すぐさま私は心を寄せましょう。

あなたは（私が）途が窮まって慟哭しているさまを知っているのだから、

その阮籍のような私を心配してくれるべきではないですか<sup>②</sup>。

この詩は、諫議大夫の官にある鄭氏に対し、前漢の季布の故事を引いて鄭氏の義気を言い、自身の窮状を阮籍に比して言う。ここで触れられるのが「途窮哭」だが、後藤秋正氏は、杜甫の詩に見える「窮途」を、「あるいは旅先での生活のゆきづまりを言い、あるいは安史の乱以後も各地で戦乱が続く国家の状況とも結びついて自身の進路

が見出せない悲痛な心境を表現している<sup>(3)</sup>と説明している。

また、「窮途」の語が詩に用いられるようになったのは、顔延之「五君詠」からだ<sup>(4)</sup>と指摘している。顔延之「五君詠」の該当する部分は次の通りである。

人の善し悪しを論じることはないが、行き詰っては慟哭するばかりだ<sup>(5)</sup>

後藤氏の指摘に従えば、顔延之「五君詠」より始まる「窮途」という詩語は、他の淵源が見つからない限り、阮籍の故事、さらには阮籍自身を意味しているということになる。

『晋書』卷四十九「阮籍伝」には、次のような記載がある。

ある時気の向くまま一人車に乗って出掛け、わき道を通らずに車を走らせ、道の窮まったところまで行き、慟哭して帰って来た<sup>(6)</sup>

この記載では、阮籍が思うままには生きられない苦しさが表現されていると考えられる。

杜甫は、先の詩の中で自身の「途窮哭」の理由として「使者は顔闔の出仕を求めたのに、諸公は襴衡を厭う<sup>(7)</sup>」を挙げている。これは、作品が玄宗の眼に触れ、試験を受けることができたが落第したことを指し、李林甫政権による妨害によって官途に就けないということを言っている。つまり、杜甫は、そのような状況における自身を阮籍に

比すことで、阮籍を志がありながらも、外的な要因で、その志を遂げることができない人物として捉えていると考えられる。

また、次の「即事」では、阮籍と「窮途」とに同時に言及している。部分のみ挙げる。

病気がちな司馬相如は起き上がる日がなく、  
行き詰った阮籍はいつ醒めるのだろうか。<sup>(8)</sup>

この詩では、阮籍は司馬相如とともに引かれている。ともに、「病気がち(多病)」「行き詰った(窮途)」で困難を示し、「起き上がる日がなく(無日起)」「いつ醒めるのだろうか(幾時醒)」とその困難な状況を打破できないでいることが言及されている。ここでも阮籍は、司馬相如と共に、杜甫自身に比されていると考えられる。「いつ醒めるのだろうか(幾時醒)」と阮籍が酒に耽溺したことを持ち出していることからすると、行き詰まりの状況にあったから、阮籍は酒によって豁然したのであって、その時代状況が合えば、酒に耽溺することなく、その才能を発揮したであろうという杜甫の阮籍観を見ることができるとして読み得る。

次の「晦日崔戡李封を尋ぬ」でも、「窮途」には触れないが、阮籍と酒との関係が言及されている。部分のみを挙げる。

上古葛天の民は、

天子に心配をかけることはなかった。

今日では阮籍のような人々（自分たち）が、  
酒に耽溺することで自身の身の安全を図っている。<sup>⑨</sup>

この詩でも、阮籍は杜甫とその友人に比されており、飲酒は韜晦の手段であったとの認識が見られる。さらに、この飲酒も最善の行為ではなかったという認識が、阮籍に言及する直前の二句から読み取れる。

現代（杜甫にとっての）は戦乱の世である。そのような世において、天子を手助けするのではなく、自分の身の安全を図ろうとするのであるから、已むを得ず行う行為であると考えられる。しかし、杜甫は実際に酒に耽溺して身の安全を図ろうとしていない。現代（杜甫にとっての）は戦乱の世で、天子が心を傷めている状況である。杜甫は、何かを成し得る立場にいないので、何もできないのは当然である。このような何もできないでいる自分が友人と酒を飲むことを、阮籍の酒による韜晦に重ねていると考えられる。つまり、友人を訪問し、共に酒を飲んで、ただそれだけのことを、阮籍の酒による韜晦を持ち出して誇張して表している。

『晋書』『阮籍伝』に次のような記載がある。

阮籍は本々世を救おうとする志を持っていたが、魏晋の時代では、世の中に難事が多く、名士でその生を全うする者が少なかったので、（阮籍は）世の中のことに関わらず、常に酒に酔っ払っていた。<sup>⑩</sup>

このような阮籍の飲酒に対する、ただ耽溺したのではないという肯定的な評価が一般的となっていたことを背景に、自身の国を思う姿勢を誇示しているとも考えられる。

次の「早に發す、射洪縣南途中の作」では、直接「窮途」「途窮」とは言わない。しかし「阮籍途」というように、「窮途」「途窮」とほぼ同じ内容を言っていると考えられる。部分のみ挙げる。

茫然と阮籍と同じような行き詰った途に立ち尽し、  
さらに楊朱のように向かう方向に迷って涙を流す。<sup>11)</sup>

ここでは、『荀子』の楊朱の故事が共に引かれている。行き止まりや岐路という先の見えない不安を表現するのに、自身を阮籍、楊朱に仮託して表現していると考えられる。

次の「秋日荆南の述懷三十韻」では、「阮籍」と言う代わりに、歩兵校尉から採られた「歩兵」が使われている。部分のみ挙げる。

(わたしは)前途に迷っては阮籍のように慟哭し、  
眠れず寝返りを打っては王粲のように哀しんでいる。<sup>12)</sup>

この詩では、阮籍の「途窮」の故事による自身の行き詰まりに加えて、戦乱によって荒廃した長安を詠った王

祭が共に描かれている。行き詰まりという自身の境遇は、これまでと同様だが、そこに王祭を加えることによって、志を持ちながらも不遇という属性に加えて、戦乱を嘆くという属性を示しているとも読める。

また、次の「秦州雜詩、二十首」其十五のように、「途窮」とは言わず、「阮籍」の語だけで、「途窮」をも合わせて表現しているものもある。部分のみ挙げる。

阮籍のような私も（東柯に行けば）興を覚えることが多いだろうし、

龐徳公のように山に隠れて世間に帰ることはない。<sup>14</sup>

この詩は、秦の地にあつて、東柯へ行くことへの思いを述べており、前半四句では、現状を述べ、後半四句にて、東柯に住んだらという期待を述べていると思われる。その第五句に、阮籍への言及がある。「（東柯に行けば）興を覚えることが多いだろう」という言表は、現状では興を覚えることは少ないということを含意している。そのような杜甫の置かれた状況が、行き詰った阮籍のようだとして自身に比していると考えるのが適切である。また、龐徳にも触れることにより、隱棲への気持ちを表していると考えられる。

また、人口に膾炙した、青眼・白眼を使い分けたという次の故事から「青眼」を引いているものもある。

阮籍は青眼と白眼を使い分けることができ、礼俗の士を見るときは、白眼で対した<sup>15</sup>

この記載では、阮籍が礼俗の士を憎んだことが表現されている。次の「巫峡の敝廬にて、侍御四舅が別れて澧朗に之くに贈り奉る」は、「阮籍」の代わりにこの「青眼」を用いている。

赤眉はまだ世を乱しており、

青眼はただ行き詰っている。

桃源の客に伝えて欲しい、

自分も今戦乱を桃源へ避けたあなたたちと同じように世を避けていると。<sup>16)</sup>

この詩は、舅である崔某が澧州・朗州へ行くのに贈った詩である。ここでは、阮籍を自身に比してはおらず、むしろ杜甫が人々に迎え入れられていることを語っている。「青眼」とは、阮籍が俗物を白眼視し、自身の気に入った人物には青眼で応じたということから、杜甫は阮籍によって自身の価値を表していると考えられる。また、続く句にて言うところからすると、後半部分は、阮籍にも認められるような価値ある自分（杜甫）は、阮籍や桃源の客と同じように、戦乱によって行き詰まり、世を避けているのだと自身に価値を与えつつ、現状に対する自己弁護をしていると考えられる。

次の「短歌行、王郎司直に贈る」も「青眼」を用いている。末尾の部分を挙げる。

(私は) 高らかに歌い青眼でもって君との別れを惜しんで眺めやる

眼中の人よ私は老いたなあ<sup>(17)</sup>

この詩は、司直の王某に贈った詩であるが、ここでは、阮籍を自身に比して、「青眼」の語を用いることによって、王某が俗人ではないという評価を与えている。

他にも、同様に「青眼」やそれに類する語を用いたものがいくつも見られる。しかし、それらの詩は、「青眼」によって阮籍を描くというよりも、阮籍から離れ、一つの熟語として用いられていると思われるので、ここでは扱わないこととする。<sup>(18)</sup>

次の「嚴公が野亭に寄せ題せし作に酬い奉る」は、先に見た「青眼」の故事に見られる阮籍の礼法の士を憎んだという属性を用いたものである。

謝安のようなあなたは山水に登臨する費用を惜しまないが、

阮籍のような私は礼法に叶っていないことがわかりません。

わざわざ我が家にお越しくださるということですから、

草が繁って見えなくなった小道を手入れしておきましょう。<sup>(19)</sup>

この詩は嚴武が寄せてくれた詩に返事をした詩である。ここでは、嚴武を謝安に、杜甫自身を阮籍に比してい

る。これは、嚴武の詩「杜拾遺の錦江の野亭に寄せて題す」の「興を発したら必ず駿馬を馳せて君のところへ伺おう」<sup>(20)</sup>に対する杜甫の返事である。通常ならば、成都尹である嚴武の下に杜甫が行くはずである。自身を礼法之士を憎んだ阮籍に比すことによって、官位の低いものが高官のところへ行くという礼法に適った行動から逃れ、その礼法に則らず、来てもらおうということで、「わざわざお越しくくださる(枉沐)」と言っているのだろう。

ここまで、杜甫の阮籍に言及した詩を見てきたが、多くの場合において、杜甫は自身を阮籍に仮託している。また、その多くが「途窮」と共に言及されることから、杜甫が阮籍に言及する主な要因は、このような阮籍の志を有しながらも果たせなかったという属性と考えられる。なお、「示姪佐」では、「嗣宗」として阮籍に触れているが、阮籍のことより、阮咸に対して言及の比重があると思われるので、ここでは論じない。

ここからは、先に見た「途窮」の使用は、顔延之「五君詠」から始まるとする後藤氏の指摘を前提に、「阮籍」や阮籍を示すような語は出てこないが、「窮途」「途窮」を用いた表現が見られる作品を確認していく。

まずは「章留後侍御に陪して南樓に宴す」の部分を挙げる。

命令を出すころにはこの江城も暗くなり、

紅い蠟燭のもと私は詩を書き付ける。

この身体は醒めてはまた酔っているという状態だが、

行き詰って慟哭するような真似はしない。<sup>(21)</sup>

この詩は、東川節度使の留後で、また侍御史でもあった章彝の供をして梓州城の南楼で酒盛りをしたことを詠っている。「しばしばごちそうにな（屢食）」り、「馬まで借りて乗る（仍騎御史驄）」といった厚遇を受けているので、阮籍のような窮状にある私だが、あなたのおかげで慟哭するようなことにはなっていないという感謝の気持ちを表している。

「途窮」と言いつつも、「阮籍とは違って官途に就けるように運動している次の「集賢院の崔于二學士に留贈し奉る」のようなものもある。

このすばらしき御代に老いていく私だが、

行き詰ってどうすることもできず宮廷の門番に叫んだのだ。

その意気は星のかなたへ衝き入り、

その言葉は帝王の感情をも動かした。<sup>(22)</sup>

勅旨による特別試に応じるために献呈した「三大礼賦」が玄宗に認められ、試験を受けることができたが、結果は落第。この詩は、去るに及んで、集賢院の学士、崔国輔・于休烈の二人に送った詩である。内容は、作品が玄宗の眼に触れ、試験を受けることができたが落第し、李林甫政権による妨害をほのめかしつつ、励ましてくれた二人

の学士に謝意を示す。「宮廷の門番に叫ぶ」とは、作品を献呈したことであろう。そこに至る状況が、「行き詰まり(途窮)」と表現されているが、皇帝に認めてもらい、任官の道を求めるということは、権力の中枢に近づこうとしなかった阮籍の事跡とは合わない。であるから、杜甫の詩における「行き詰まり(途窮)」は、政権の中枢に近づくことを拒んだ阮籍の精神性は閑却され、志がありながらも外的要因によって任官できないという状況のみを抽出して表現されていると思われる。

次の「哥舒開府に投贈す二十韻」も、同様に精神性を閑却して用いられている。部分のみ挙げる。

春草が枯れるのを見送ったのはもう幾年か、

今日の私は日暮れの途が行き詰っている状況です。

孫楚のような反骨の士を幕僚に留め、

兵卒の間から呂蒙を見出したあなた。

私にあるのは身を守る一振りの長剣ですが、

あなたの本陣のそばにある崆峒山にそれを立てかけたく思います。<sup>(23)</sup>

この詩は、当時安祿山と並んで最も有力な軍人である哥舒翰に「投贈」、つまり、先立って交際していなかった人物に贈った詩である。内容は、哥舒翰への賛美と自述であるが、「行き詰まり(途窮)」とその状況からの脱却を願う部分がある。苦しい現状を伝え、抜擢を期待している。「日暮れの途(暮途)」は、楚の伍子胥の嘆きを指すと

思われるが、それに「窮」を加えて、「行き詰まり（途窮）」の意味をも付け加えている。ここでは、現在の窮状と官職への願望が語られている。

このように、杜甫は阮籍の「途窮哭」の故事の精神性を閑却し、志がありながらも外的要因によって官途に就けないという状況を指して用いていると考えられる。<sup>24</sup>

顔延之が「五君詠」にて用い、阮籍の逸話を示す「途窮」ではあるが、「阮籍」や阮籍を示すような語と共に用いられるのではなく、単独で「途窮」または、「窮途」を用いる場合、阮籍の事跡から離れて、様々な要因による現在の窮状を示す熟語となる傾向が強い。無論、顔延之が阮籍の事跡を「途窮」と詠ったことに端を発するのであるから、阮籍の事跡と全く関係がないということは考えにくい。しかし、杜甫は「途窮」によって示される阮籍の事跡をそのまま自身に置き換えるだけではなく、自身の置かれた境遇や状態などを付け加えて用いていることから、必ずしも阮籍を示すのではなく、困窮などの状態を示す熟語として用いられていると考えられる。

「途窮」を単独で用いた例からは、実際に阮籍自体を示す語を用いた例のような、杜甫の阮籍への仮託を多く見ることができない。しかし、この「途窮」を使用する例が多く見られることから、杜甫がこの語を好んで用いていたことが考えられる。その背景には、やはり杜甫の阮籍への仮託があると思われる。

杜甫の阮籍への仮託を示す次のような興味深い例がある。次の「丹青引」は、「青眼」に関わる内容である。部分のみ挙げる。

將軍の絵は神妙さを備えており、

偶然にも素晴らしい人物に出会えばその真の姿を描くだろう。

しかし今は兵乱の最中に漂泊し、

しばしばただのつまらない人物を描いている。

戦乱によって行き詰まり（その絵画は）俗眼に受け入れられず、

將軍より貧乏なものはいない状況である。

昔から盛名を担う人物は、

いつも不遇がその身に付きまといっているものだけだ<sup>25</sup>。

この詩は、唐代の著名な画家、曹覇に贈られた詩であり、詩全体を通して、曹覇の描く絵の素晴らしさを詠っている。

全体の流れとしては、曹覇の先祖である魏の武帝・曹操から説き起こし、書から絵画へ進み、その絵の巧みさを表すものとして、凌煙閣の功臣像と玉花驄のエピソードが語られる<sup>26</sup>。

次に、その技術を受け継ぐものとして韓幹が挙げられている。韓幹は、「惜しいことに姿は描くがその精神を描かず、駿馬の意気を萎ませてしまっている（幹惟畫肉不畫骨、忍使驂驪氣凋喪）」と否定的に描かれるが、これは曹覇の卓越さを示すための否定的な評価だろう。

そして、挙げた詩の末尾部分では、天子に度々拝謁するという栄光から一転、安史の乱による漂泊と窮乏を描いて終わる。

この詩は、一見曹覇を阮籍に比しているが、次のような見方が存在する。

私が思うにこの詩において公（杜甫）は曹覇を借りて自身を述べている<sup>(27)</sup>

これは、明の王嗣奭の「丹青引」評である。このように、「丹青引」の末尾の一段は、曹覇に贈ったというコンテキストから、曹覇を描いてはいるが、自述であるとする見方がある。このような見方があることから、杜甫が自分と阮籍を重ね合わせているとも言える。

杜甫が自身と阮籍を重ね合わせていることに注目し、この詩を杜甫の祈りという観点から見れば、「素晴らしい人物に出会えばきつとその真の姿を描くだろう（偶〔必〕逢佳士亦寫真）」とは、杜甫自身の素晴らしさを見抜いてほしいという意味と考えられる。また、「戦乱によって行き詰まり（その絵画は）俗眼に受け入れられず（途窮反遭俗眼白）」とは、杜甫自身も曹覇と同じような境遇であり、同様に人々から受け入れられていないという意味と考えられる。そして、「昔から盛名を担う人物は、いつも不遇がその身に付きまといっているものだけということを見るばかりである（但看古來盛名下、終日坎壈纏其身）」と言うところからすると、杜甫は自身が、書、絵画における曹覇の卓越さを認めているのと同じように、自身に何らかの価値を認めて欲しいという願望、もしくは、自分にも何らかの価値があるという自負を述べていると考えられる。

このような杜甫の祈りは、曹覇に贈られた詩という制約から、直接的には表現されない。つまり、描かれた曹覇と描いた杜甫を重ね合わせて読んで欲しいという控えめな表現となっている。

そして、この詩には異文が存在する。末尾から三句目、

將軍より貧乏なものはいない状況である（世上未有如公貧）。

とあるところが、『文苑英華』では、

他の人は富み今や自分だけが貧しいという状況にある（他富至今我徒貧<sup>28</sup>）

という異文を挙げている。この異文における「我」は、詠われている曹霸のことであるが、先に見たようなこの詩が自述であるとする見方で考えれば、「我」は杜甫をも意味していると考えられる。自述としては露骨になるが、仮託という観点からすれば、興味深い異文である。

この異文と「本文」との先後関係は不明であり、異文が杜甫自身の手によるものかどうも不明である。この異文が杜甫自身の語であるとすれば、先に見たように杜甫が自身を阮籍に仮託している一つの例と考えられる。それに対して、この異文が他者の語であるとすれば、杜甫の阮籍への仮託を過剰に盛り込んだものと思われる。

杜甫が阮籍に自身を仮託していることは、これまで見て来た例から読み取れる。しかし、二例だけではあるが、阮籍を否定しているものがある。

次の「大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿塘峽を出づ、久しく夔府に居り、將に江陵に適かんとして漂泊す、詩

有り凡そ四十韻」では、表面上での否定が見られる。部分のみ挙げる。

私は素晴らしい時代に生を受けたので、

行き詰って慟哭することを本分とはしない。

今は病に伏せて旅客となっているが、

天子の恩を受け早くから傍に仕えたものだ。

自然に背かず（思ったことを言ってしまう）天子と論争し、

正直な気持ちから地方の地を乞うて中央を去ったのだ。<sup>29</sup>

この詩では、阮籍の生きた時代と現代（杜甫にとつての）とを比較し、真似をしないということを言っている。それでは、行き詰るのはどうしてか。房琯の事で、「天子と論争し（廷争）」、その結果、「中央を去った（乞江湖）」からだ。晩年に至った杜甫が、これまでの人生を振り返り、自分の納得できる解釈をしていると考えられる。「行き詰って慟哭することを本分とはしない（誰分哭窮途）」と言うからには、行き詰っているという状況にあると、言うことと同じであり、時代は違えど、自分は阮籍と同じような志をもった人間だという自負が見られる。つまり、ここでの否定は、表面上での否定であり、阮籍自体やその属性を否定しているのではなく、杜甫＝阮籍という仮託はそのままだ、生きた時代状況が異なることから、同じように志を持ったという属性だが、その行動も異なるということとを述べていると考えられる。

次の「秋日夔府の詠懷、鄭監李賓客に寄せ奉る一百韻」は、「途窮」「窮途」とは言わない。しかし「途中」という表現を用いて、同様の内容を言っていると思われる。部分のみ挙げる。

（この途を行く私は）行き詰って慟哭して帰った阮籍ではなく、

筏に乗って西域へ向かった張騫のようである。<sup>30)</sup>

この詩では、行く末の不安ではなく、希望を抱いていると考えられる。また、「張騫のよう」だと阮籍よりも張騫に自身を比しているが、「有感五首」其一に「どこにも張騫のような人物を見つけない（それほど素晴らしい人物だ）」とあるように、杜甫は張騫を評価していることがわかる。つまり、志を持ちながらも行き詰まっては泣いていた阮籍よりも、遥かな西域へ旅立つて行った張騫をより評価しているということである。

杜甫は、先祖に杜預や杜審言など有名な人物を持つてはいたが、杜甫が生まれたころには典型的な没落士族であり、有力な後ろ盾もおらず、科擧にも落第した。生涯の内、就いた官職も、ほとんどが地方の官職であり、中央の官職に就いたときも、すぐに左遷され、志を果たす機会とは与えられなかった。このような生涯とその詩からすると、杜甫は生涯を通して志を果たせないことを嘆いたと言っても過言ではないだろう。

そんな杜甫にとって、「志を果たした自分」という自己像は、常に理想であったと考えられる。先に見た張騫は、杜甫の「志を果たした自分」として夢想する一つの例であろう。

その理想とする「志を果たした自分」に至れぬ、今現在の自分を仮託して、自身の素晴らしさを喧伝するのに適

した人物としたのが阮籍だと考えられる。杜甫にとつて阮籍は、もちろんただの無能な酒飲みで、街を車でうろついては泣いて帰るといふ狂人なのではなく、志を持ちながらも時代や境遇のせいで、世のために力を発揮することができないという存在と思われる。このように考えれば、前詩に見るような阮籍に対する否定は、志を果たせなかつた阮籍の自分に対する否定を示していると考えられる。

阮籍を否定しているように見える詩においても、阮籍への仮託ということは変わらず、むしろ、阮籍の自分に対する否定ということで、より強く仮託していたのかもしれない。

## 第二章 嵇 康

前章では、「窮途」は阮籍を念頭に置いて用いられたものという前提に立って見てきたが、念頭にあつたのは阮籍だけではないと思われる。次の「悶を遣る、嚴公に呈し奉る二十韻」のようなものがある。

あなた（嚴武）は寛容で不器用な私をそつとしておいてくれ、  
行き詰つた私を馬の毛並みを整えるように世話してくれる。<sup>20</sup>

この詩は、前出の嚴武に奉つた詩であり、嚴武に対する感謝を述べている。しかし、「どうして（嚴武の）幕下に来てしまったのか（胡為來幕下）」、「座ることによる足の痺れ（坐痺）」、「頭痛（頭風）」、「他課の人と意見の衝突があ

る（分曹失異同）、「亀が網に引っ掛かっているようだ（信然龜觸網）」、「籠の中から外を覗いている鳥のようだ（直作鳥窺籠）」と官に就くことによる束縛を嫌っているようなことも同詩にて語っている。

このような束縛を嫌う言葉は、阮籍よりも嵇康の方が近いと思われる。次の「河南の韋尹丈人に寄せ奉る」では、さらに嵇康に近づく。部分のみ挙げる。

あなたの栄達は私とは地が絶たれたほどに差があり、

勝手気ままである私は途が窮まったように感じられる。

どぶろくを好んだ陶淵明を尋ね、

丹砂を煉る葛洪を訪ねるように隠逸を試してみた。

この世界に粗末な服を漂わせ、

霜や雪のような白髪がざんばら髪に増えてきた。

大いなる天地の間に落ちぶれて、

うろつき回ってみてみたが道術が身についたわけではない。<sup>33</sup>

この詩は、河南尹である韋濟は栄達したが、そのような立場を超えて自分を気にかけてくれることに感謝して寄せた詩である。官界への道が閉ざされていることに対する絶望感を述べており、官途が断たれたことによって隠逸の真実事をしているという自身の状況を指して、阮籍の当時の状況と重ねているとも考えられる。つまり、阮籍の

隠逸は司馬政権への出仕を逃れるための方便だという考えである。

以上は、杜甫が自身を阮籍に比しているとした場合の解釈となる。もう一つ、嵇康に比した場合の解釈を考えてみたい。

まず、第二句「勝手気まま(疏放)」であるが、向秀は「思舊賦」の序において次のように言っている。

しかしながら嵇康の志は遠大だがむらがあり、呂安の心は広大だが気ままである<sup>34</sup>

向秀は、嵇康の志、呂安の心を評している。それぞれ挙げられた「遠大(遠)」と「むら(疏)」、「広大(曠)」と「気まま(放)」の内、否定的な評価である「疏」と「放」を合わせたものが、「疏放」である。つまり、杜甫は自身のことを嵇康や呂安のように遠大な志、広大な心を持つてはいるが、その志はむらがあり、気ままな人物であると主張していると考えられる。

そして、嵇康は、「山巨源に與ふ絶交書」において、次のように言っている。

自分で推測してみたところ、道が尽き行き詰ってしまうことははっきりしている<sup>35</sup>

嵇康は、官途に就いた場合を推察して絶望している。ここで、嵇康がその「山濤に與ふ絶交書」において「途窮」と言っていることから、「疏放憶途窮」とは、嵇康を念頭において述べられたものとも考えられる。しかし、

嵇康は山濤に自身の後任として推薦されたことに對して絶交書を書いた。杜甫が官職を望んで得られない状況とは異なる。

それでは、どのような解釈が可能か。

筆者が可能だと思ふ解釈は、杜甫は、嵇康が推薦を拒んだことなどを全て理解した上で、それを転倒し、「嵇康は官に就きたくなくて絶望したが、私はその反対に官に就けなくて絶望しています」と述べているとすることだろ  
う。

これまで見てきた例からもわかるように、もちろん、「途窮」は阮籍と強く結びついている語であることから、阮籍を全く念頭に置いていなかったとすることはできない。であるから、杜甫は、阮籍とともに嵇康をもその念頭においていたと考えたい。杜甫の嵇康に対する考えを見ることにより、杜甫が嵇康への思慕も抱いていたことを確認していく。

まずは、「比部の蕭郎中十兄に贈る」を見る。部分のみ挙げる。

山陽にて鍛冶をして暮らしていた嵇康や、

野谷の村で牛を飼っていた愚公のように暮らしたいのです。

どうしてあなたのような長者の車を迂回させて訪問させることができましようか、  
故郷へ帰って隠居し身を運命に任せようと思ひます。<sup>(36)</sup>

この詩は従兄の蕭某に贈った詩である。嵇康の鍛冶のエピソードが引かれている。ここでは、二つの方向が考えられる。一つは、「どうしてあなたのような長者の車を迂回させて訪問させることができましょうか」の句と合わせて考えれば、嵇康が向秀と共に鍛冶をしており、鍾会の訪問を受け入れなかったことを念頭に置いているとする解釈である。蕭某は従兄であるから、訪問を受け入れないということはなかったと思われるので、官職にある従兄に対して、うだつの上からない自分を卑下していると考えられる。もう一つは、「故郷へ帰って隠居し身を運命に任せようと思」うの句と合わせて考えれば、嵇康が政治の世界に見向きせず、鍛冶を好んでやっていたように、自分も好きなことをして暮らそうと表明していると考えられる。しかし、二つの解釈は互いに矛盾するものではないので、両方を含意していると考えたい。

嵇康が刑死させられたのは周知のことだが、杜甫も嵇康の死について二つの詩にて触れている。一つは、「酔ひて馬より墜つるを為す、諸公酒を攜へて相看る」である。部分のみを挙げる。

どうして馬を走らせて来て見舞う必要があったのか、

君も知っているだろう嵇康が養生論を書いたのに殺されたのを。<sup>38</sup>

この詩は、酒を飲んで馬から落ちた杜甫を、友人が見舞いに来てくれたことを描いた詩である。ここでは、嵇康が「養生論」を書いたということ、刑死させられたということとを繋げて、「養生論」を書くのが長生きしない人もいるし、老いた身で馬から落ちても死なない人もいる、寿命は天命だと言っていると考えられる。嵇康の「養生

論」と刑死は、関係のあるものではなく、「養生論」の養生は、刑死しないための養生ではなく、道家の養生である。嵇康の生涯の内の二つの要素を合わせて、友人に対するユーモアとして提示していると考えられる。もう一つは、「興を遣る、五首」其一である。部分のみ挙げる。

龍は冬の三ヶ月を穴に籠って過ごし、

老いた鶴は万里の大空を飛ばうという心を抱いている。

昔の俊賢も、

まだ時運に乗れていなかったときは自分が現今を眺めているような気持ちだったのだろう。

嵇康は良い死に方をしなかったが、

孔明はわかり合える友人を得た。<sup>39)</sup>

この詩は、古の人物のことに触れて、自身の気持ちを述べた詩である。「老いた鶴は万里の大空を飛ばうという心を抱いている」と、老いてはいるが志は持っているという自負を語り、「昔の俊賢も、まだ時運に乗れていなかったときは自分が現今を眺めているような気持ちだったのだろう」と古の賢俊に思いを馳せる。嵇康は、その俊賢として言及されている。しかし、嵇康は賢俊のうちでも良い死に方ではなかった人物として描かれている。

次の「蕭二十使君に贈り奉る」は、友人関係を表すのに、嵇康を引いたものである。

(あなたは嚴武にとって) 張孟のように家事を取り仕切る人物であり、

(私にとって) 嵇康が息子を託した友人のような存在である。<sup>(40)</sup>

この詩は、嚴武の幕下にあつたときの同僚蕭某に贈った詩である。この友人とは、息子の嵇紹を託した山濤だと思われる。友人関係を表現するには、管鮑の交わりや芻頸の交わりなど、古来用いられてきた典故がある中、嵇康と山濤を選んでいるところに、自身を嵇康に比すということの重要性が示されていると考えられる。

嵇康を自身に比しているものもある。「李八祕書に贈り別る三十韻」の部分のみを挙げる。

(君が) 司馬相如のように病気がちだと言って退いてから、

(わたしも) 嵇康のようにあまり人と交遊しなくなった。<sup>(41)</sup>

この詩は、李某に贈った詩である。ここでは、李某を司馬相如に比し、自身を嵇康に比している。嵇康が妄りに人と交際をしなかったことを持ち出して、自身に比している。

次の「同谷縣より發す」では、直接的に嵇康に言及してはいない。だが、嵇康の「幽憤詩」を引いている。

普段から無精で世渡りの下手な私だが、

偶然にも隠棲するのに良さそうな地に出会った。

行くも留まるも自分の思いと異なり、

林の中に所を得た鳥を仰いでは恥ずかしく思う。<sup>(42)</sup>

この詩は、隴右から劍南へ赴くことを描いている。直接的には嵇康に言及していないが、嵇康の「幽憤詩」を引いている。「自分の思いと異なり」(興願違)がそれである。「幽憤詩」の関係する部分は次の通りである。

樂しげに鳴き交わす雁は、

翼を羽ばたかせて北へ飛ぶ。

季節に従って移り行き、

満ち足りて心配することなどないのだ。

ああ 私は憤り嘆く、

雁と比べるべくもない。

状況は私の思いと食い違い、

囚人として獄に繋がれている。

苦難も榮光も天命なのだから、

求めても仕方がないのだ。<sup>(43)</sup>

ここで重要と思われることは、どちらも鳥を自由の象徴として描いていることであり、また、置かれた事態が自分の思い通りにならないという嘆きである。

また、「幽憤詩」だけでなく、「山巨源に與ふ絶交書」からの引用もいくつか見られる。

まずは、「張十二山人彪に寄す三十韻」である。部分のみ挙げる。

自分は無精もので名声によって世に出たはいいが一身の処置を誤り、東西を走り回るはめになって自分のありのままの姿を失ってしまった。<sup>(45)</sup>

この詩は、隠者の張彪に送った詩である。この「無精もの」(疏懶)は、嵇康が「山巨源に與ふ絶交書」にて自分自身を説明するのに用いている(表記は「疏懶」)。

性格は怠けもので、身体はなまって緩んでおり、頭と顔は月の半分は洗わず、ひどく痒くなければ、身体を洗いません<sup>(46)</sup>。

杜甫には、他にも「疏懶」を用いて自身の無精さを説明しているものがある。「佐山に還りて後寄す、三首」其一の部分のみ挙げる。

お前（甥である佐）は心得ていてくれる、

この無精な叔父はお前に手を引いてもらう必要があるということ<sup>(17)</sup>。

この詩は、甥の佐が山に帰ったあと寄せたものである。ここでも、杜甫の無精さの説明に用いられている。

阮籍のところ<sup>(18)</sup>で触れた「秦州雜詩、二十首」其十五でも「疏懶」に触れている。該当箇所のみ挙げる。

東柯では思いつきり無精をするつもりなのだから、

鬢の斑になった白髪を切ることなんてやめよう<sup>(18)</sup>。

ここでは、無精をすることへの期待を述べるのに用いられている。

次の「屏跡、三首」其二は、髪に関するものである。部分のみ挙げる。

子供は学業を怠るがそのままにしており、

いつも貧乏だが妻に心配させたままにしている。

生涯ずっと酔っぱらっているのが願いで、

無精で一月中頭に櫛を入れることはない<sup>(19)</sup>。

この詩は、浣花草堂での生活を描いている。これは、頭髮など身体の手入れということで一つの範疇に括れば、先ほど挙げた「山巨源に與ふ絶交書」の「頭と顔は月の半分は洗わず（頭面常一月十五日不洗）」を踏まえていると思われる。

次の「傷秋」でも髪に関して触れられている。

私は無精でなおざりだから髪もたまにしか櫛を入れず、

艱難辛苦を経て帯もたるんでしまった。<sup>(50)</sup>

前詩と同様に「山巨源に與ふ絶交書」の「頭と顔は月の半分は洗わず」（頭面常一月十五日不洗）を踏まえていると思われるが、ここで言う「懶慢」も、「山巨源に與ふ絶交書」の「私の大雑把さは礼儀に反してしまいが、怠惰と気ままさは私の中で結びついている」<sup>(51)</sup>を踏まえていると思われる。

ここまで、嵇康に関わるものを見てきたが、杜甫がその詩において、嵇康が自身を説明した語句を用いて自身を説明している例がいくつも見られた。杜甫は、阮籍のところで見たとように、度々志を果たせぬことを述べているが、嵇康も志を果たせぬことを述べている。

「幽憤詩」に見える例を挙げれば、

内を省みては平素の志に背き、  
外に対しては良友に恥ずかしく思う。<sup>(52)</sup>

とあり、また、

私一人がどうして、  
志を抱いても遂げられないのか。<sup>(53)</sup>

とも言っている。つまり、嵇康は志を果たせぬまま、その生涯を終えた人物であり、杜甫は、自身が志を果たせぬことの一つの内在的な原因として、嵇康と同じように「無精」という属性を挙げていると考えられる。

杜甫は、その絶頂期と言える、中枢に近い左拾遺の職にあつたとき、房琯を擁護したことで左遷させられている。良かれと思って言ったことによつて、良くない結果を招いたということを、「至慎」<sup>(54)</sup>と評され、情勢を鑑み、口を閉ざすことができた阮籍のように黙っていることができないと自己評価していた可能性がある。

この点に関して、阮籍と嵇康に対する杜甫の考えの差異は、どのようなものだったのだろうか。「衡州に入る」に次のような句がある。

私は嵇康を師とするものであり、

世間では郴州掾の張勸のことを賢人だと評している。

郴州へ行ったら質素な家を樂土に建て、

その張勸が出世するのを眺めよう。<sup>(55)</sup>

この詩は、潭州にて乱に遭い、衡州に逃れ、郴州に行くことを考えていることを描いた詩である。この「嵇康を師とする」は「山巨源に與ふ絶交書」の次の言説を踏まえていると思われる。

阮籍は人の欠点を口にしたことがなく、私はいつも彼を師として学ぼうとしているが、未だに及ぶことができません<sup>(56)</sup>

「衡州に入る」の「嵇康を師とする」ということが、嵇康の言説を典故として用いられていると考えれば、次のように考えられる。

嵇康は、「人の欠点を口にしたことがない阮籍を師として学ぼうとした。杜甫は、その嵇康を師として学ぼうとしている。つまり、同じく志を果たせなかった阮籍と嵇康ではあるが、杜甫は、阮籍のように「至慎」と評される態度をとることができず、思ったことを口にしてしまうという嵇康を師としたいと考えていたということである。

また、もう一つの方向が考えられる。杜甫がこれまでの人生を振り返ったときに、自分自身の有する属性が、「無精」であり、思ったことを言ってしまうということであったことに気づき、それが嵇康に似ていると判断した

という方向である。

以上のような二つの方向が考えられるが、どちらにも共通するのは、杜甫の謙遜という意識である。前者では、私は嵇康のような人間であり、阮籍のようにはなれませんという謙遜であり、後者は、思ってみれば私は嵇康のような属性を持った人間でしたという謙遜である。

阮籍が志を果たせなかつたのは、先に見たように、外在的な理由によると杜甫は捉えていた。嵇康の場合は、その無精さ、思ったことを口にしてしまうという内在的な理由である。杜甫にとっては、外在的にはその出自、李林甫政権による妨害、安史の乱といった理由があり、内在的には、その無精さ、思ったことを言ってしまうということが、杜甫自身の言葉から読み取れる。実際に、杜甫がどの程度無精であり、どの程度思ったことを口にしたのかは知ることができない。しかし、自身を謙遜して示す人物として嵇康という存在が考えられていたと考えられる。

杜甫の阮籍と嵇康に対する捉え方は、同じように志を果たせなかつた人物ではあるが、その要因に外在的、内在的という差異が見られる。

では、その阮籍と嵇康が同時に引かれた場合を見てみたい。阮籍、嵇康を並称して言及している例は二つある。まずは、「台州の鄭十八司戸を懐ふこと有り」を部分のみ挙げる。

これまで魑魅を防げと遠方へ流された人々は、  
その多くは才名が高かつたためである。

あなた（鄭虔）は昔の嵇康・阮籍のような人物であり、  
そのためにさらに世俗のものに憎まれたのだ。<sup>57</sup>

この詩は、台州に司戸として左遷された友人鄭虔を思つて詠った詩である。これは鄭虔を才名があり、嵇康・阮籍のように世俗を超越した人物として評している。

次に「台州の鄭司戸蘇少監を哭す」を見るが、これも部分のみ挙げる。

私は才能があまりなかったが交際を許され、

お二人に追隨したがそれは形骸に囚われない精神的な交遊であった。

お二人は昔の班固・揚雄のようにその名声は盛んで、

嵇康・阮籍のように超俗しては互いに必要とした。<sup>58</sup>

この詩は、前詩に登場した鄭虔と秘書少監であった蘇源明とを哭した詩である。ここでは、二人との交遊が描かれている。これも前詩と同じように鄭・蘇の二人の超俗という属性を、嵇康・阮籍を引いて評価している。

以上、阮籍・嵇康を二人同時に言及している例を二つ見た。一人ずつ言及する場合には、世俗を超越していたという評価を持ち出すことは少ないが、並称した二例は両方とも超俗という属性について触れている。これは、阮籍や嵇康を同時に引くことによって、その個人の属性が薄まり、共通の属性、つまり超俗という属性が前面に出てき

ていると思われる。また、阮籍、嵇康の二人を引くときは、「嵇阮」となっており、「阮嵇」とはなっていない。二例だけで判断できないが、「嵇康を師とする」と言っていることから、杜甫は、同様に志を果たせなかった人物であつても、嵇康の方により親しみを覚えていたのかもしれない。

### 第三章 その他の五人

前章まで、言及の多く見られた阮籍、嵇康の二人を考察してきたが、この章では、言及のあまり見られなかった残りの五名を見ていく。

まずは阮咸である。「八哀詩、故の著作郎、貶台州司戸、滎陽の鄭公虔」の末尾に次のようにある。部分のみ挙げる。

百年と言われる生涯において私は生き残り君は死んでしまった、

残されたさびしい私は誰を頼ったら良いのか。

君はいなくなつてしまつたが阮咸とも言うべき君の姪がいる、

君の甥の進退は私と同じように世の網に引つ掛かつて左遷させられている。

後日江陵へ君の甥を訪ねるときは、

君への哀しみを含みつつ君の代わりに私の漂泊の身の上話を聞いてもらおうと思う。<sup>59</sup>

前章にも登場した友人鄭虔を哀しんでいる。ここでは鄭虔を阮籍、その甥を阮咸に比して、それぞれを評価していると考えられる。この叔父、甥の関係を阮籍、阮咸に比している例がいくつか見られる。

次の「姪佐に示す」もその一例である。部分のみを挙げる。

阮籍には多くの子供、甥がいたが、

その中でも阮咸が賢いと前から思っていた。<sup>(60)</sup>

この詩は、甥の佐に示した詩である。ここでの阮籍は杜甫自身を指し、阮咸はその甥の佐である。自身と甥の関係を阮籍と阮咸の関係に比して、甥の佐を評価していると思われる。

次の「忠州の使君姪の宅にて宴す」も叔父、甥の関係を述べている。部分のみ挙げる。

我が杜家の血を引く甥は中央から出て刺史となっている、

他郷ではあるが今日はここで宴会だ。

叔父、甥の関係であるので阮咸に比すべき甥の家で遊んでいるのであって、

この先の湖灘という難所を恐れているわけではない。<sup>(61)</sup>

この詩は、忠州刺史である甥の宅で宴会をしたことを詠った詩である。この甥は前詩に登場した甥の佐と同じではないと思われるが、ここでも阮籍、阮咸の関係を引いている。

次の「阮隱居に貽る」は、叔父、甥の関係ではなく、阮氏一族を引いている。部分のみ挙げる。

陳留の風俗は衰え、

傑出した人物は世間において数えるに足るものはない。

ところがこの秦州にてあなた（阮昉）と知り合った、

あなたこそ同じ阮姓である阮籍や阮咸の風格を継ぐ人物である。<sup>62</sup>

この詩は、隱者の阮昉に贈った詩である。ここでは、阮昉を評価するのに、阮籍、阮咸を含める阮氏一族を引いている。阮昉が隱者であるということもあるが、ここでも、阮籍、嵇康を同時に引いたのと同様、阮籍、阮咸らをまとめて言及することで、その個人の属性が薄まり、阮氏一族という超俗の属性で語られている。

ここまで、阮咸に言及した四例を見てきたが、阮咸に言及すると言つても、阮咸個人に言及するのではなく、叔父、甥の関係として、阮籍、阮咸を用いるという言及のされ方であった。「阮隱居に貽る」では、阮籍、阮咸を含めた阮氏と同姓である阮昉という関係性が述べられていた。杜甫が阮咸個人に対してどのような評価を下していたかはわからないが、阮籍との関係によって、友人とその甥を評価していることから、阮咸に対しても少なからず肯定的な評価をしていたと考えられる。

次に山濤に言及したものを、わずか二例ではあるが見ていく。まずは、「魏二十四司直が嶺南掌選崔郎中の判官に充てらるるを送り兼ねて韋韶州に寄す」である。部分のみを挙げる。

崔氏の鑑識眼は山濤のように明白であり、

魏氏は陸賈のように千金の装いを人からもらって嫌疑がかかるようなことをしてはならない。<sup>(63)</sup>

この詩は、魏某が崔某の属官、判官に充てられ嶺南に向かうのを送り、兼ねて韶州刺史の韋迢へ寄せた詩である。崔氏の鑑識眼を評価するのに、山濤が引かれている。

次の「張十三建封に別る」は、直接的には山濤に言及していないが、嵇康との交遊で山濤に言及している。部分のみ挙げる。

君は范雲が晩年に友人とするに値した謝朓のような人物であり、

嵇康が死に臨んで息子を託した山濤のような人物でもある。<sup>(64)</sup>

この詩は、張建封との別れに臨んで詠った詩である。張建封は、杜甫の友人の子であり、幼いころ会ったことがある。ここで、杜甫は自身を嵇康に比し、張建封を山濤に比して、嵇康が死に臨んで「山濤がいるから、お前は一

人ではない」と言ったように、自身の息子を託していると思われる。

山濤に言及したものは、「山公啓事」で知られる山濤の鑑識を評価するものと、嵇康との交遊が触れられている。興味深いのが、阮咸のところで見たように、阮籍と阮咸とが言及されたとき、杜甫は阮籍の位置にあり、嵇康と山濤に言及したときには嵇康の位置にあることである。杜甫自身は、常に阮籍、嵇康の位置にあるということから、阮咸、山濤に一定の評価を与えつつも、やはり、阮籍、嵇康に対する思い入れが強く表れていると思われる。それは、第一、二章で見たように、阮籍、嵇康の志を果たせなかったという属性に、杜甫自身が己を見ていることから来ていると考えられるだろう。

その点から考えると、言及が見られなかった王戎、劉伶、向秀の三人は、そのような属性でもって語られることがなく、血縁、友情という面でも阮咸、山濤ほど阮籍、嵇康に近いとは見られなかったからだろう。向秀に関しても、嵇康との交遊が知られているが、死に関わるというその逸話の劇しさによって、山濤の方が選ばれやすかったのだろう。

最後に、「竹林七賢」全員と言うよりは、その「竹林の游」を示すと思われるが、嵇康の旧居があったとされる地、「山陽」を引いているものを見ていく。まずは、「王二十四侍御契に贈る四十韻」である。部分のみ挙げる。

「竹林七賢」が集った山陽に比すべきここは俗物はおらず、  
鄭當時が賓客をもてなしたように私をもてなしてくれる。<sup>(66)</sup>

この詩は、侍御史である王契に贈った詩である。王契の邸宅を褒めているが、この「山陽に俗物はいない」には、二つの意味が含まれていると思われる。一つは、自分たちを「竹林七賢」に喩え、王契の邸宅を嵇康の旧居があった「山陽」に喩え、その超俗という属性を主張するということである。もう一つは、それに付随して、次の逸話を踏まえている場合である。

嵇康、阮籍、山濤、劉伶が竹林で酒を飲んでいて、王戎が遅れて来た。阮籍は言った「俗物がまた来て人の良い気分を壊す」と。王戎は笑って答える、「君たちの気分は、壊すことのできるようなものなのか」と<sup>(47)</sup>

この逸話を踏まえて考えると、一つ目の超俗を主張するという意味は補強される。そしてさらに、王戎は俗物であったという杜甫の否定的な評価が得られる。これだけで、杜甫が王戎に否定的な評価を下していたと断定するには至らないが、詩において阮籍、嵇康には言及しているが王戎に言及していないことから、そのような推測は許されるだろう。

次の「翰林の張四學士に贈る」は、「山陽會」と言うところから、「竹林の游」を念頭に置いていることは確かだと思われる。部分のみ挙げる。

万一あなたが我々が集った山陽の会のことを思うのなら、

この悲しい歌を聴いてください。<sup>(88)</sup>

この詩は、翰林学士であった張垚に贈った詩である。張垚たちと交遊したことを「山陽の会」として表現している。交遊の親密さを言っていると考えられるが、さらに自分（杜甫）は、「竹林七賢」と同じような属性を持った人物であるという仮託が見られる。

### おわりに

小論では、杜甫の詩に見られる「竹林七賢」への言及を見てきた。ここで、杜甫がどのように「竹林七賢」を捉えていたのか、まとめておく。

まず、「竹林七賢」という語での言及は見当たらず、それに近いものとして「山陽」を用いたものが挙げられるが、その場合、「竹林七賢」はその超俗性を詠われており、それを友人との交遊に比していることから、肯定的な評価であったと考えられる。

次に、言及の数の多さとして阮籍、嵇康が突出している。これはその知名度や作品の数などからして妥当なものと思われるが、その詠われるイメージは阮籍と嵇康で差異が見られた。阮籍は、その「途窮」の逸話に見られるように、志を果たせぬというモチーフが度々現れる。その志を果たすことのできない原因は、外在的なものであり、杜甫の自身の外在的な要因による志を果たせぬ思いを阮籍に託していると思われる。

それに対して嵇康は、その怠惰や思ったことを口にしてしまうという属性が挙げられ、「阮籍と同じように志を果たせぬ人物だが、それは内在的な原因によるという解釈がなされ、杜甫も自身の不遇を嵇康と同じように内在的な原因を挙げて示していた。ここから、

外在的な原因によって志を果たせぬ人物 ≡ 阮籍  
内在的な原因によって志を果たせぬ人物 ≡ 嵇康

という杜甫の二人の人物に対する認識が読み取れる。

そして、阮咸、山濤についての言及では、一定の評価を下しつつも、それは叔父、甥の関係として阮籍に、劇的な友情関係として嵇康に関わっていることによる言及であり、それぞれを積極的に用いるということではなかった。王戎、劉伶、向秀に関しては言及が見当たらず、判断を下せないが、これまでの阮籍、嵇康理解、阮咸、山濤に対する言及のされ方から推し量るに、三名に対しては、特に取り上げるほどの興味を抱かなかつたと思われる。

杜甫の関心は、阮籍、嵇康の二人に集中しており、小論は純然たる「七賢観」とは言えないかもしれない。しかし、杜甫は「山陽」という語で、「竹林の遊」に言及し、阮籍、嵇康以外にも阮咸、山濤にも言及していることから、「竹林七賢」という概念を、杜甫が有していたのは確実と思われる。「竹林七賢」としての七人を認識しながら、関心を二人に集中しているということは、裏を返せば、その他の五人は杜甫にとって重要な存在ではないということだろう。

杜甫の「竹林七賢」理解とは、彼らは俗世を超越した人物であったというもの以上のもではない。「竹林七賢」から離れたときに、阮籍、嵇康のその志を果たせなかったという個々の属性が現れる。この二人は、杜甫が自身の不遇という状況を表現し、さらにはそれに意識的に近づこうとするような存在であったと考えられる。

注

- (1) 杜甫の詩の引用は、全て仇兆鰲注『杜詩詳注』（北京、中華書局、一九七九年一〇月、第一版）を使用する。なお、引用は拙訳にて示し、原文を注で示す。
- (2) 原文「將期一諾重、歛使寸心傾。君見途窮哭、宜憂阮步兵。」（前掲書、一一二頁）。
- (3) 後藤秋正氏「『窮途』補記…詩語のイメージ」（『北海道教育大学紀要』人文科学・社会科学編、五三卷一号、二〇〇二年九月、二七～四二頁）二八頁。
- (4) 前掲論文、二九頁参照。
- (5) 原文「物故不可論、途窮能無慟」（『蕭統』『文選』成都、中華書局、一九八一年七月、第一版、三〇三頁）。
- (6) 原文「時率意獨駕、不由徑路、車跡所窮、輒慟哭而反」（房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版、一三六一頁）。
- (7) 原文「使者求顔闔、諸公厭禰衡。」（仇 前掲書、一一一頁）。
- (8) 原文「多病馬卿無日起、窮途阮籍幾時醒。」（前掲書、一七八三頁）。
- (9) 原文「上古葛天民、不貽黃屋憂。至今阮籍等、熟醉為身謀。」（前掲書、二九七～二九八頁）。
- (10) 原文「籍本有濟世志、屬魏晉之際、天下多故、名士少有全者、籍由是不與世事、遂酣飲為常」（房 前掲書、一三六〇頁）。
- (11) 原文「茫然阮籍途、更灑揚朱泣。」（仇 前掲書、九五五頁）。
- (12) 原文「蒼茫步兵哭、展轉仲宣哀。」（前掲書、一九〇六頁）。

- (13) 王粲「七哀詩、二首」其一に「西京亂無象、豺虎方遘患。復棄中國去、遠身適荆蠻」とある（蕭 前掲書、三二九頁）。
- (14) 原文「阮籍行多興、龐公隱不還」（仇 前掲書、五八五頁）。
- (15) 原文「籍又能為青白眼、見禮俗之士、以白眼對之」（房 前掲書、一三六一頁）。
- (16) 原文「赤眉猶世亂、青眼只途窮。傳語桃源客、人今出處同」（仇 前掲書、一六八二頁）。
- (17) 原文「青眼高歌望吾子、眼中之人吾老矣」（前掲書、一八八六頁）。
- (18) 見られた例は以下の通り。「飲中八仙歌」の「宗之蕭灑美少年、舉觴白眼望青天」（前掲書、八三頁）。「秦州にて敕目を見るに、薛三璩は司議郎を授けられ、畢四曜は監察に除せらる。二子と故有り、遠く遷官を喜び、兼ねて索居を述ぶ、凡そ三十韻」の「別來頭併白、相見眼終青」（前掲書、六三三頁）。
- (19) 原文「謝安不倦登臨費、阮籍焉知禮法疏。枉沐旌麾出城府、草茅無徑欲教鋤」（前掲書、八八七頁）。
- (20) 原文「興發會能馳駿馬」（彭定求等奉勅撰「全唐詩」、北京、中華書局、二〇〇三年七月、第一版第七刷、第八冊二九〇七頁）。
- (21) 原文「出號江城黑、題詩蠟炬紅。此身醒復醉、不擬哭途窮」（仇 前掲書、一〇一七頁）。
- (22) 原文「昭代將垂白、途窮乃叫閭。氣衝星象表、詞感帝王尊」（前掲書、一三〇頁）。
- (23) 原文「幾年春草歇、今日暮途窮。軍事留孫楚、行間識呂蒙。防身一長劍、將欲倚崆峒」（前掲書、一九二頁）。
- (24) 同様に阮籍から離れ、熟語としての「途窮」の用例がいくつも見られる。戦乱による交通の不便の意味で用いられる「地隅」の「江漢山重阻、風雲地一隅。年年非故物、處處是窮途。」（前掲書、二〇三〇～二〇三二頁）。金銭における困窮の意味で用いられる「率府の程録事が郷に還るを送る」の「内愧突不黔、庶羞以調給。素絲挈長魚、碧酒隨玉粒。途窮見交態、世梗悲路澀」（前掲書、三四四頁）、「客夜」の「計拙無衣食、途窮仗友生」（前掲書、九三二～九三三頁）。また、「老い」という要素が加えられた「嚴侍郎を送りて綿州に到り、同じく杜使君の江樓に登りて宴す」の「窮途衰謝意、苦調短長吟」（前掲書、九一五頁）、「立秋雨る、院中にて作有り」の「窮途愧知己、暮齒借前籌」（前掲書、一一六九頁）。「窮乏」「老い」が合わせて描かれる「暮秋將に秦に歸らんとす、湖南の幕府の親友に留別す」の「途窮那免哭、身老不禁愁」（前掲書、二〇八九頁）。子供にとつての旅路のことを指す「閬州自り妻子を領し卻りて蜀に赴かんと山行す、三首」其三の「僕夫穿竹語、稚子入雲呼。轉石驚魑魅、抨弓落狢貍。真供一笑樂、似欲慰窮途」（前掲書、一一〇三頁）。

- (25) 原文「將軍畫善蓋有神、偶逢佳士亦寫真。即今漂泊干戈際、屢貌尋常行路人。途窮反遭俗眼白、世上未有如公貧。但看古來盛名下、終日坎壈纏其身」(前掲書、一一五一頁)。
- (26) 張彥遠撰「歷代名畫記」(叢書集成簡編、台北、台灣商務印書館、民國五五年、三〇二頁)卷九に「曹霸、魏曹髦之後。髦書稱于後代。霸在開元中已得名。天寶末、每詔寫御馬及功臣。官至左武衛將軍」とある。
- (27) 原文「余謂此詩公借曹霸以自狀」王嗣爽撰「杜臆」(統修四庫全書)上海、上海古籍出版社、一九九五年、三月、影印本、一三〇八冊、四九二頁)。
- (28) 李昉等編「文苑英華」北京、中華書局、一九九五年二月、第四刷、第三冊一七五八頁に「世上未有如公貧」は一に「他富至今我徒貧」に作るとある。
- (29) 原文「此生遭聖代、誰分哭窮途。臥疾淹為客、蒙恩早廁儒。廷爭酬造化、樸直乞江湖」(仇 前掲書、一八七〇頁)。
- (30) 原文「途中非阮籍、查上似張騫」(前掲書、一七三三頁)。
- (31) 原文「無處覓張騫」(前掲書、九七一頁)。
- (32) 原文「寬容存性拙、剪拂念途窮」(前掲書、一一七九頁)。
- (33) 原文「尊榮瞻地絕、疏放憶途窮。濁酒尋陶令、丹砂訪葛洪。江湖漂短褐、霜雪滿飛蓬。牢落乾坤大、周流道術空」(前掲書、六八〇六九頁)。
- (34) 原文「然嵇志遠而疏、呂心曠而放」(蕭 前掲書、二二九頁)。
- (35) 原文「自卜已審、若道盡塗窮則已耳」(前掲書、六〇三頁)。
- (36) 原文「中散山陽鍛、愚公野谷村。寧紆長者轍、歸老任乾坤」(仇 前掲書、六七頁)。
- (37) 「嵇康傳」に「初、康居貧、嘗與向秀共鍛於大樹之下、以自贍給。潁川鍾會、貴公子也、精練有才辯、故往造焉。康不為之禮、而鍛不輟。良久會去、康謂曰、何所聞而來。何所見而去。會曰、聞所聞而來、見所見而去。會以此憾之」とある(房 前掲書、一三七三頁)。
- (38) 原文「何必走馬來為問、君不見嵇康養生被殺戮」(仇 前掲書、一五九二一五九三頁)。
- (39) 原文「蟄龍三冬卧、老鶴萬里心。昔時賢俊人、未遇猶視今。嵇康不得死、孔明有知音」(前掲書、五六三頁)。
- (40) 原文「張老存家事、嵇康有故人」(前掲書、二〇五二頁)。

- (41) 原文「文園多病後、中散舊交疏」(前掲書、一四五六頁)。
- (42) 原文「平生懶拙意、偶值棲通跡。去住與願違、仰慚林間翮」(前掲書、七〇六頁)。
- (43) 原文「嗚嗚鳴鳩、奮翼北遊。順時而動、得意忘憂。嗟我憤歎、曾莫能儔。事與願違、遭茲淹留。窮達有命、亦又何求」(蕭 前掲書、三二八頁)。
- (44) 嵇康の詩に表れる「飛鳥」のイメージを論じたものに、興膳宏氏「嵇康の飛翔」(『中国文学報』第十六冊、一九六二年、一〇二八頁)がある。
- (45) 原文「疏懶爲名誤、驅馳喪我真」(仇 前掲書、六五七頁)。
- (46) 原文「性復疏懶、筋駑肉緩、頭面常一月十五日不洗、不大悶癢、不能沐也」(蕭 前掲書、六〇二頁)。
- (47) 原文「舊語疏懶叔、須汝故相攜」(仇 前掲書、六二九頁)。
- (48) 原文「東柯遂疏懶、休鑷鬢毛斑」(前掲書、五八五頁)。なお、「疏懶」は、一に「疏放」に作るが、どちらも嵇康を示していると思われる。
- (49) 原文「失學從兒懶、長貧任婦愁。百年渾得醉、一月不梳頭」(前掲書、八八三頁)。
- (50) 原文「懶慢頭時櫛、艱難帶減圍」(前掲書、一七八二頁)。
- (51) 原文「簡與禮相背、懶與慢相成」(蕭 前掲書、六〇二頁)。
- (52) 原文「內負宿心、外惡良朋」(前掲書、三二八頁)。
- (53) 原文「予獨何為、有志不就」(前掲書、三二八頁)。
- (54) 『世說新語「德行」篇に「晉文王稱阮嗣宗至慎、每與之言、言皆玄遠、未嘗臧否人物」とある(劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』上海古籍出版社、二〇〇二年二月、第一版、一五頁)。
- (55) 原文「我師嵇叔夜、世賢張子房。柴荆寄樂土、鵬路觀翱翔」(仇 前掲書、二〇七二頁)。
- (56) 原文「阮嗣宗口不論人過、吾每師之、而未能及」(蕭 前掲書、六〇二頁)。
- (57) 原文「從來禦魑魅、多爲才名誤。夫子嵇阮流、更被時俗惡」(仇 前掲書、五六〇頁)。
- (58) 原文「許與才雖薄、追隨跡未拘。班揚名甚盛、嵇阮逸相須」(前掲書、一一九二頁)。
- (59) 原文「百年見存歿、牢落吾安放。蕭條阮咸在、出處同世網。他日訪江樓、含悽述飄蕩」(前掲書、一四一三頁)。

- (60) 原文「嗣宗諸子姪、早覺仲容賢」(前掲書、六二八頁)。なお、「嗣宗」は、一に「阮宗」に作るが、同じく「阮籍を指していると思われる。
- (61) 原文「出守吾家姪、殊方此日歎。自須遊阮舍、不是怕湖灘」(前掲書、一二三四頁)。
- (62) 原文「陳留風俗衰、人物世不數。塞上得阮生、迴繼先父祖」(前掲書、五四四頁)。
- (63) 原文「明白山濤鑒、嫌疑陸賈裝」(前掲書、二〇五六頁)。
- (64) 原文「范雲堪結友、嵇紹自不孤」(前掲書、二〇一〇頁)。
- (65) 原文「巨源在、汝不孤矣」(房 前掲書、一二二三頁)。
- (66) 原文「山陽無俗物、鄭驛正留賓」(仇 前掲書、一二二七頁)。
- (67) 原文「嵇、阮、山、劉在竹林酣飲、王戎後往。步兵曰、俗物已復來敗人意。王笑曰、卿輩意、亦復可敗邪」(劉 前掲書、六五二頁)。
- (68) 原文「儻憶山陽會、悲歌在一聽」(仇 前掲書、一〇〇頁)。